清末留日中国人学生と愛国意識の高揚
― 牧口常三郎著『人生地理学』を中心として ―

高橋　強

1．序
2．愛国意識形成の要因
3．実業による産業救国
4．教科書による教育救国
5．新知識による科学救国
6．結び

1．序

今から約100年前の20世紀の初頭、中国から日本への大きな留学の波が起こった。最盛期の1906年には１万２千名に達したと言われる。もちろん留学の目的は多岐に渡ろうが、大半は中国に先駆けて近代化に成功した日本の経験を学び、中国の近代化促進に資するためであった。日本の経験を、ある時は学校での講義から、またある時は新聞雑誌や書物から、さらには日常生活の見聞の中から等、精力的に吸収していった。

当時中国が置かれていた国内外の情勢は、清朝政府の弱体化、日本を含めた西洋列強による中国分割の危機等、極めて複雑で深刻であった。そうであるが故に、留学生の中国に対する心情は深まり、愛国意識も高まって行ったと考えられる。列強に仲間入りし、中国に対し勢力を拡大しようとしていた

日本に滞在しているが故に、その意識は更に強くなっていったと思われる。

本稿は、まず愛国意識形成の要因を３つのファクター、即ち日本ファクター、中国ファクター、新知識ファクターから概観し、次にその愛国意識が個々の事例にどのように反映されているのかを分析しながら、留学生の愛国意識の高揚を考察する。

個々の事例として本稿が取り扱うのは、牧口常三郎（創価教育学の創始者・創価学会初代会長、1871年-1944年）著『人生地理学』（1903年10月初版）の４種類の中国語翻訳編集版である。

牧口は1904年から1907年にかけて、留日中国人学生の多くが通う弘文学院（後に宏文学院に改名、1902年-1909年）で地理学（「人生地理学」）を教えた。同「人生地理学」の内容は、牧口の講義を受講した江蘇師範学生によって、1906年に江蘇省の教科書『江蘇師範講義・地理』として翻訳編集され出版された。翌年1907年には『最新人生地理学』として全訳が、1909年には弘文学院出身の凌廷輝により『人生地理学』として翻訳編集され出版された。『人生地理学』の最初の翻訳は1903年で、『浙江潮』に部分訳が掲載されている。『人生地理学』は出版直後から、留学生に注目され始めたということになる。これらには、いたる所に翻訳編集者の見解が追加されており、当時の留日学生の日本や中国や国際情勢への心情や認識を理解する上で、大変に貴重な資料となっている。

２．愛国意識形成の要因

（1）日本ファクター

近代中国のナショナリズムの勃興には、二つの歴史的過程があると言われる。[(1)] 一つは清末以降の中国と、先行して近代国家になっていた国々との交流である。留学生の日本への派遣は、中国ナショナリズムの勃興を刺激する象

徴的契機の一つである日清戦争勃発後の1896年に始まる。洋務派官僚の張之洞が「一年間の洋行（留学）は３年間の読書に勝る」と述べたように、改革を担う人材の育成には留学が効果的であると考えられていた。初めは十数人程度に過ぎなかった日本留学生は1905年に8000名、1906年には１万2000名へ急増した。(2)

実藤恵秀は、中国人留学生の観念について次のように捉えている。“来日前は、郷党観念は強いが、国家観念・民族観念は弱かった。しかし日本に生活することによって、変化せざるを得なかった”と。そしてその変化の原因として、積極的原因と消極的原因をあげている。積極的原因は、日本人の愛国心に刺激されて、これを移入しようとしたことである。梁啓超は「祈戦死」という文章の中で、日本の出征軍人を送る幟の文句「祈戦死」を見て、深く感動したことを述べている。(3)

穂積八束『国民教育愛国心』の翻訳が北京大学堂書局から発行され、教科書として使用されたり、また日本の愛国者の伝記も多く翻訳された。例えば、『吉田松陰遺墨』（国民叢書社）、『日本七十三義侠伝』（神戸、東亜書局1898年）、『日本近世豪傑小史』（商務印書館1903年）、『日本維新人物志』（金港堂1903年）等。これらは、直接的に中国人を刺激し、愛国心や民族意識を育てていった。(4)

消極的原因とは、日本の対中国侵略政策や日本人の中国人軽蔑である。日本人が中国人を軽蔑して呼ぶチャンコロという言葉は、日本人の側からも「閉口する」とか「我慢できない感情」と指摘されている。1905年日本政府は清朝政府の要請を受け「清国留学生取締規則」を公布したが、留学生は「日本政府は僕らの人格を尊重しない」と反発し、帰国運動にまで発展した。(5)

以上の分析を通し実藤恵秀は次のように結んでいる。「その愛国心は、日本が直接、間接に教えたものであるともいえる。ただ、その愛国心によって

抵抗されたのは、ほかならぬ日本であったところが悲劇である」と。[6]

（2）中国ファクター

1890年代から20世紀初頭にかけて中国では、亡国の危機、瓜分の危機が問題にされ、救国こそが知識人の課題とされてきた。日本に留学しているが故に、この救国の意識が更に高まる中、義和団戦争で出兵したロシア軍が東北地方に居座り侵略行為に及んでいることに憤慨し、留学生は1903年に東京で「赴敵致死」の拒俄義勇軍を結成し抗議した。清朝はこの運動を革命派による策動と受け止め、東京の拒俄義勇軍を解散させ、上海や北京で開催された反ロシア集会を解散させた。これを知った留学生はもはや清朝に未来はないと考え、革命に参加するようになったという。[7]

斉藤道彦は、この拒俄運動における留学生の意識の変化を次のように捉えている。当初は、清朝中国の「国民」という意識でもって、清朝がロシアに抵抗することを求めていて、漢族に限定された「中国」ではなく、また華夷意識も認められない。しかし清朝の運動抑圧策に対して、運動側から反発が起こり、「わが漢種」という漢族意識・「排満」論が表明されるに至った。そしてこの漢族意識・「排満」論への転換に、主導的役割を果たしたのが鄒容の『革命軍』（1903年）であり、時期的には1903年５月から６月ころであったと指摘している。[8]なお清末民初に大いに流行した「人種」という新知識、それが近代中国の民族意識の形成におよぼした影響も無視できない。[9]

斉藤の次の記述はこの転換を絶妙に表現している。「『革命軍』は『排満』意識の起爆剤となり、劇薬のごとき効き目で清朝『中国人』意識を分解し、清朝と『中国』を分解させ、清朝『中国』の『国民』としての恥辱感を漢族としての恥辱感に転換させたのであった」。[10]

この「排満」論は排満革命論者たちによって、漢族の民族意識と誇りを確立・普及するために、漢族は「黄帝の子孫」あるいは「炎黄（炎帝・黄帝）

の子孫」であることが強調し始められた。『黄帝魂』（1903年）の出版はその先鞭といわれる。『民報』創刊号（1905年）の刊頭には黄帝の肖像が掲げられ、その上に「世界第一の民族主義の大偉人、黄帝」と書かれ、肖像の下には「中国民族開国の始祖」と書かれている。[11]

『秋瑾集』によると「黄帝紀元大事表」が1903年に発表された。1904年に華興会に参加した宋教仁は、同年、清朝皇帝年号を使うことを拒否し、黄帝紀年を用いることを主張している。[12]

（3）新知識ファクター

近代中国のナショナリズムの勃興の二つ目の歴史的過程は、西洋の「種族」、歴史と地理、政治と法律といった新知識・新思想・価値観の中国への伝来である。[13]

留学生は日本で、それぞれの専門分野で精力的に新知識・新思想の吸収に取り組んだ。そのことは、現在残されている夥しい数の翻訳書や講義録、雑誌などに掲載された論説によって知ることができる。梁啓超は亡命後、「来日以降、日本書を博捜して読むと興味津々として応接に暇なく、自分の頭脳もそのために変わり、思想言論も別人のように一変した」（「汗漫録」）と述懐しているが、同様の思想的体験をほとんどの留学生たちが共有したことであろう。[14]

1896年から1911年にかけて、日本書の漢訳は958種類にのぼり（実際は更に多いと言われる）、その内訳として多い順に、社会科学（政法）366種、世界史地175種、自然科学・応用科学172種、語文133種類等であった。世界史地の多さは、世界情勢を理解し外国の経験をモデルにし、民族覚醒を喚起するためであった。[15]

留学生の翻訳振りについて梁啓超は、次のように述べている。「日本で新しい書物が出ると翻訳者がややもすると数人出るというふうで、新思想の輸

入は澎湃として起こった」(『清代学術概論』) と。[16]

清末民初に大いに流行した「人種」という新知識、それが近代中国の民族意識の形成におよぼした影響も無視できない。『地理全志』には、世界の人種は白人・黄人・紅人・黒人・銅色人の五種に分けられると書かれており、人種の挿図が付されていた。それらによって、自らを中国人という「黄族人」と位置付け、自らそうありたいと願うという民族意識が次第に形成され、それが当時の中国人の「亡国滅種」という危機意識の重要な構成要素となった。[17]

当時、地方（省）を中心とした秩序再建の下、省への帰属意識を高める議論も活発化し、主として都市の知識人は、省－中国－世界という広がりの下に重層的な帰属意識を抱くようになっていた。[18]

留学生が日本で定期発刊した雑誌例えば『浙江潮』では、毎号省内の府の地図を掲載した。この地図は従来の地方志に見える「輿地図」の類とは異なり、西洋の新知識を導入し、縮尺を意識して山河・城鎮等の地勢をそのまま表現している。さらに浙江省そのものも中国地図の中に位置付けて、「府－省－中国」という階層性を認識させ、それぞれに対する帰属を確認する契機として地図が使われている。同誌は、このような認識の延長として、全世界の中に中国を位置付け、そして自らの省をその中に位置付けようとしている。[19]

新知識・新思想との出会いは、自身の人種としての、また中国の中での位置付を、さらに中国の世界の中での位置付けを意識させ（存在論)、中国のあるべき姿をも熟慮させ（価値論)、様々な救国の方途を提起する為の貴重な機会を提供することとなった。

3．実業による産業救国

『人生地理学』第17章「植物」の翻訳が、『浙江潮』（第９期、10期1903年11月、12月）「植物与人生之関係」として掲載された。「植物与人生之関係」は同誌の中では「実業」という項目に分類され、翻訳者は黄孫である。

内容は、『浙江潮』に掲載された各地物産の調査報告「紹興新昌県」（第４期1903年５月）、「青田県」（第６期1903年７月）、「湖州」（第７期1903年８月）等を、『人生地理学』「植物」の視点から整理し、次にそれを翻訳し、更にそれに関連する中国の現状や、翻訳者自身の見解を書き加えた体裁をとっている。この追加の部分に、当時の留学生の意識が十分に反映されている。

例えば、『人生地理学』第17章第２節「工芸製造用植物」の中にある稲、麦、粟属、豆類、甘蔗および甜菜、甘藷および馬鈴薯、茶、煙草、藍、綿、麻、亜麻の項目の内、稲、麦、豆類、甘蔗、茶、綿、麻、煙草のみを翻訳し、桑を新たに加えている。浙江省の実情に合わせて項目を選択している。稲や桑の項目では、“紹興酒は米で醸造したもので、葡萄酒と同様に称されるべきで、我が浙江の富の源である”[20]と、また桑の項目では、“我が国浙江一帯が最適の地である”[21]等、郷土への自負が至る所に表現されている。麦や甘蔗の項目では、中国への北アメリカや日本からの輸入状況を紹介し、その超過に憤慨している。[22]綿の項目では、中国綿のよさを述べる一方で、西洋諸国では綿から紙を作っているが、“中国はまだその域に達していない”[23]と嘆いている。

また『人生地理学』第17章第２節「果樹類」の中にある梅、柑類、桃および柿、梨類、林檎および葡萄等の項目の内、梨、林檎、葡萄のみに言及し、新たにレイシ、龍眼、ミカン、ザボンを加えている。訳者は日本やドイツの実情を調査し、次のような主張をしている。「日本人はその事情を調べ果実業を大いに奨励している。薩摩の橙、紀州のミカンは輸出され、大きな利益

を得ている。我国がもしこれを模倣できれば、利を得ることは莫大であろう。ドイツ人が山東に果物工場を開き、安く各種の果物を集め、欧米に運び大きな利益を上げているそうだ」[24]と。

『人生地理学』第17章第２節「森林の生業に対する直接効用」の中にある摺附木、洋紙の内、洋紙のみを翻訳している。ここでは、“上海の書店にならぶ書籍の紙は皆日本製だと知り大変に悲しんでいる”、“故郷である浙東では竹林が多く、農民は多く製紙をしているが、製品は黄色で粗悪である”、“印刷事業に従事しようとする者は、異邦の輸入品を用いざるを得ない”と現状を述べ、「新法を用いて、粗を精にし、黄を白にして、莫大な利源を実現させよう。同胞たちよ、その為に立ち上がろう。我が生活を豊かにする為に、もし再考しなければ、異民族が我々にとって代わるだろう」[25]と結んでいる。産業救国の熱き心情が表現されている。

以上の各項目において追加された内容は、結果として郷土浙江のそれから更に中国全体にまで言及したものになっている。

『人生地理学』第10章「海洋」の翻訳が、『浙江潮』(第10期1903年12月)「地人学」として掲載された。「地人学」は同誌の中では「地理」という項目に分類され、翻訳者は壮夫である。

内容は、『人生地理学』第10章「海洋」第７節「海洋と衛生」、第８節「海洋と産業」、第９節「海洋と心情」、第10節「開明人と海洋」の抄訳をしながら、訳者自身の見解を加えたものである。漁業や水産業の振興を訴えている一方、特に第10節の中の「太平洋と列国」の項目の部分では、欧米列強国が太平洋を舞台にして、船舶や海運等を以て、制海権、通商権をめぐって熾烈な競争を繰り広げている現状を、詳細に紹介している。

訳者は自身の見解の中で、“陸軍を以てではなく鉄道を以て、海軍を以てではなく、船舶運輸事業の勢力を以て”、“白人化されつつある支那問題”を指摘し、中国が“無限に白人化”[26]されようとしている危機感を述べたり、ま

た“中国は太平洋上の国家で、太平洋での権限を有するのは当然である”にもかかわらず、それを実現する為の海軍が根拠地とすべき港が、西洋列強国に分割されており、“どのようにして、吾人らの手に取り戻すことができようか”、“英国、ロシア、フランス、ドイツ、アメリカ、日本の各強国”の勢力から“自立が出来るのであろうか”[27]等、現状を憂う心情が十分に述べられている。

なお『浙江潮』では魯迅も、愛国主義を鼓舞した翻訳小説「スパルタの魂」（第５期、９期）、亡国の危機感や産業救国の心情に溢れた地質論「中国地質略論」（第８期1903年10月）、科学への興味を喚起しようとした翻訳小説「地底旅行」（第10期）等、多数の文章を発表している。

４．教科書による教育救国

1906年に江蘇師範生の編集による『江蘇師範講義・地理』が、江蘇寧属学務処と江蘇蘇属学務処より出版された。同書は江蘇師範生が、日本に留学していた際、弘文学院で牧口常三郎の『人生地理学』の講義を受けて、仲間数人の講義ノートを編集し教科書として出版したものである。

同書の「序」には、「人生地理学。日本牧口常三郎講義。（略）講師、牧口先生には専門書がある。根拠が甚だ正確である。その中での議論も多く豊かである。編集し要約を選んだものである。以て教科書の用に備える。もし全貌を見たいと欲するならば、先生の原著『人生地理学』があるので、参考にする事ができる」とある。[28]

内容は、受講した内容を編集した部分に、編集者独自の見解が新たに追加され、計５編21章（原著『人生地理学』より13章少ない）から構成され、５枚の地図が付されている。第１編第２章は測量製図理論に関する内容で、これは原著には存在しない。正確な地図作成への需要の高さが現れている。当

時は地図を通しての重層的な帰属意識の形成が必要とされていた。教科書として編集するに当たり、その地図作成に関わる内容を追加したのであろう。教育的配慮を感ずる。

編集者による追加部分を分析すると、次の３つの内容、即ち日本に関する記述、中国に関する記述、西洋と中国に関する記述に分けられる。

(1) 日本に関する記述：

「個人と世界の関係」について講義を聞き、“中国が世界の中でおかれている位置を明らかにしなければならない”と主張している。その際に次の注意点を指摘している。“その位置を高すぎて見ると、尊大ぶってしまう。ここでの弊害は驕りである。驕りは進歩がない。またその位置を卑しすぎて見ると、臆病になる。日本は前者ということになろう”[29]と。日本への批判がある一方で、“維新の前、鎖国派の者が気勢を張ったが、幸い騒然状態も長くなく、民の智慧は次第に、自らのその地位の所在を明らかにし始めた”ことに評価を与えている。客観的な態度で観察している。

「世界の体勢は、陸地から海面へ向かう」について講義を聞き、日本の現状を分析している。“島国の地位は優勢で、人口が増加し、収まり切れなくなると、次第に植民地を企て、勢力を拡大するであろう。日本の侵略政策は、最近発動し始めた。太平洋は将来大和民族の格好の舞台であろう、との議論が久しい”[30]と。さらに“英国に属する多くの地は、どこも優れた地になっている。英国はその経営に力を注ぎ、その勢力の拡張は、どこまで行くのか推測もできない”[31]と、日本ばかりでなく英国の植民地拡大にも警戒している。世界情勢に極めて敏感である。

「島国の特質」を受講して、日本人の愛国心を想起したのであろう、日露戦争の中でのそれについて言及している。“島民（日本人）は愛国心を担う以上は、国家の大事に際しては、知っていることは何でも行い、形式は足らなくても、精神は余裕しゃくしゃくである。日本軍は旅順を包囲し、無数の

生命を投入して顧みなかった”[32]と述べている。ここでの愛国心には、やや無鉄砲といった意味合いが込められているように思える。

「海洋」を受講して、編集者が新たに商業との関係を追加し、特に日本と中国の商業関係に言及している。“中国は綿花を日本に輸出する。日本製の布が中国に逆輸入され、その価格は数倍に増加する。故に文明国人は原料を購入する人で、未開国人は原料を売り出す人である。（略）文明国は未開国を抑圧している。（略）今日経済の上では、結局主従関係にある”[33]と。

(2) 中国についての記述：

「半島と文化の関係」を受講する中で、「半島は文化の起源地である。孔子が山東半島で生まれた如く」との牧口の学説に触れて、儒教を想起し次の内容を追加している。“儒教の影響は全国に遍き、近くは朝鮮から遠くは日本まで至り、崇拝されている。西暦944年日本は朝鮮を通して論語10巻、千字文１巻を得て、儒教と文字を持ち始めた”[34]と。中国文化に対する誇りが表明されている。

中国への誇りは、「河と人生の関係」を受講して追加した揚子江流域の記述にも表れている。更にそこでは日本との比較までしている。“中国揚子江の灌漑流域は約12万平方里で、日本の面積と比較すると、４倍強で大変に驚く。（略）貨物の集積は多く、人口密度も高い。まさにアジア第１の大水である”[35]と。

(3) 西洋と中国についての記述：

「世界における自らの位置を明らかにする」という主題は、列強諸国特に西洋との関係に言及するに至るのである。その中で特に関心が向けられたのは、貧富の格差である。編集者はそれを生み出した要因として、工業発展の格差に注目して次のように述べる。“東洋と西洋の貧富の分岐点は工業にある。工業の発達とは優れたものを製造し（原料）輸入の金額が莫大であること。工業の行き詰まりとは粗悪なものを製造し（粗悪品）輸出の金額が莫大

であること。(略) 西洋人は富を得、東洋人は貧を得ている”[36]と。

編集者は、中国がすでに世界経済のシステムに組み込まれていることを、十分に認識するに至ったのであろう。東西の経済関係を次のように表現している。“商戦の世に国を立て、政治の上で独立を主張しても、経済の上では主従に属する。東洋人の製造は行き詰まっている。常に原料を輸出し、西洋人が厚利を享受できるようにさせている。東洋人は西洋人の労働者になっている。地理学を語る者は、速やかに措置をめぐらし、主権を回収しなければならない”[37]と。

「主権の回収」については、更に言及が続き、次のような提案もしている。“アジア人が生来愚かということではない。欧州人が各種の利器を発明できたことと、アジア人が古い道に拘泥し、改良を求めてこなかったことによる。今日アジア人はすでに古きを変え、新しきに従うことができているので、後日は必ずアジア人は欧州人を乗り越え追い越すことができる”[38]と。

5．新知識による科学救国

1907年に『人生地理学』の全訳が上海群益書局から『最新人生地理学』として出版された（7月に初版、10月には再版が出版)。翻訳は膠州湾にあった世界語言文字研究会編集部による。「白洋」による「序」[39]に、新知識としての『人生地理学』に対する反響が現れている。

進化論の影響を強く受けているのであろうか、“生物のその多くは地球の環境に不適応であったので、その発展過程において、次第にその種を消滅させていった。人類は全ての生命の中で、最も適応能力を有する種類である”との話題から始まっている。次に人類と自然との関係について、“全ての生命（生物）の生存方式は、自然からの運命的支配を受け入れる方式である。人類は一種の主体的存在として、自然からの運命的支配を受け入れることに

甘んじないで、自身の命運を自身で掌握することを望んだが、自然の規律に違背することはできなかった。中国四千年の悠久の文明は、人々が積極的に自然界に順応し獲得してきた成果である”と、自然の規律への順応の重要性を述べている。

最後に読者に対する啓蒙的な内容で結んでいる。“しかし自然界に対し、我々自身は自然界の中の一分子であることを、果たして理解しているかどうか。中国の地表、地表下は、我々とその他動物が共に存在している環境である。人類は自然の規律に違背していないと自慢していたが、どれだけ実行して来たのであろうか。本書『人生地理学』の著者は、人類は使命を負っているのに生命の意義を理解していないことを、また地球に責任を負っているのに、科学の道理を理解しないことを咎めたが、もし我が国の民衆が関心がなければ、どうなることであろうか”と。進化論の影響、自然界やその他動物との共生思想等が表現されていて、大変に興味深い。

「凡例」[40]の中に“この書は、私が著したものでなければ、編集したものでもなく、翻訳したもので、他人の研究成果を使用したので、一人の中国人として、只々、恥ずかしい限りである”とあるが、当時の留学生が大量の日本語書籍の翻訳作業に追われ、研究成果を出せない現状に、自身に対しても、また誇りある中国に対しても不甲斐なさを感じたのかも知れない。

1909年に凌廷輝編『人生地理学』が上海にある新学会社から出版された。前述の『最新人生地理学』を底本にして、牧口常三郎『人生地理学』を翻訳し、編者の見解を追加した内容である。本書編集の目的は「総論」[41]に明らかにされている。

そこではまず「人生地理学」という新しい学科に大きな期待を寄せている。“人類がこの地球上に存在して、生存競争をしているが、大地と如何なる関係を持っているのであろうか。その真実の原理が分かるためには、地理

と人生の関係を理解しなければならない。(略) 地理学は多くの学科と密接な関係を持っているので、地理学の思想や知識を拡充するためには、地理と人生の相互関係を研究する必要がある”と述べている。

次に「人生地理学」により形成された地理知識をもって民衆を啓蒙し、弱国中国を救って行きたいとの心情を表明している。“地球上の種族間競争は、優勝劣汰、弱肉強食の状況を呈している。今日民族帝国主義の目的は勢力拡大にあるが、その実現の鍵は世界観念があるか否かである。世界観念があるか否かの鍵は地理知識があるか否かである。従って強国の民衆は豊富な地理知識を持ち、弱国の民衆はそれが欠乏しているはずである。(略) 欧米列強の狡猾な陰謀に勝利したいと思うならば、民衆の眠りを覚ますことだ。地理を理解しないで、何に頼るのか。地理という学科のみが、列強の陰謀を伺い知るに足り、愛国精神を奮い起こすに足るのである”と。地理知識に対する期待の大きさ、それの包括する範囲の広さにはやや驚きを感じるが、新知識による救国の心情が十分に表明されている。「人生地理学」を、一種の中国を救済する啓蒙の学科と捉えているようである。

なお追加された編者の見解の中では、特に第18章「海」や第19章「洋」において見られるように「海上権」に関する記述が多い。そこでは西洋列強の北太平洋における勢力拡大を取り上げ、“北太平洋即ち中国全土は、実際は列強の注視の的となっている”[(42)]と、中国をめぐる国際関係への懸念を表している。また欧州の地理歴史に関する記述も豊富である。

6. 結　び

留日学生の愛国意識を、その形成要因である3つのファクターから、留日学生が中国語に翻訳編集した『人生地理学』の中で考察して見ると、実に興味深い側面を見出すことができる。

日本ファクターについては、日本の経済侵略への憤りや日本の尊大さへの批判、また日本の太平洋に向けての勢力拡大に警戒という形で表れている。他方、世界における自らの位置を明らかにし始めた民の智慧には、一定の評価を与えている。日本から学ぶという姿勢は存続している。日本人の愛国心については、関心は持っていたのであろうが、やや無鉄砲といった意味合いで捉えている。

中国ファクターについては、中国語に翻訳編集された『人生地理学』が漢族意識・「排満」への転換がなされた後に出版されたので、清朝中国の「中国人」意識というものは感じられない。漢族中国人として、広大な中国や中国文化への誇りを表現する一方で、中国の遅れた現状への嘆き、困窮状態を憂う心情がいたる所に現れている。特筆すべきことは、そこで留まることなく、産業の振興を通して、また教科書の編集を通して、さらに新知識の普及を通して、救済の方途を模索し提示していることである。強い責任感を感じる。

新知識ファクターについては、新しい学科としての人生地理学に大きな期待を寄せ、それを受けて進化論や共生思想の新たな展開を試みている。またこの期待は更に大きくなり、人生地理学による地理知識をもって民衆を啓蒙し、弱国中国を救済して行きたいとの心情も表明されている。知識人としての自覚と気概を感じる。なお新しい知識としての測量製図理論は、地図を通して全世界の中に中国を位置付けようと試みる際に、大きな役割を果たすものと思われる。

「人生地理学」の翻訳編集に携わった留学生は、「世界の中での中国の位置」について多くの視点を吸収した。特に欧米列強が太平洋を舞台に、制海権や通商権をめぐり熾烈な競争を繰り広げている現状、そしてその国際関係における中国の位置付けについては、強い関心を持ったのであろう、その関連の記述が多い。また東西の経済関係の中で中国を位置付け、“商戦の世界

にあっては、政治の上で独立を主張しても、経済の上では主従に属する”や“東洋人（中国人）は西洋人の労働者になっている”の認識は極めて的確である。

牧口著『人生地理学』は、留日学生の愛国意識の高まりのその渦中に存在した一書であると言っても過言ではないだろう。留日学生の関心を引き付けてやまなかったものは一体何なのか、その解明は今後の課題としたい。

注

（1）飯島渉、久保亨、村田雄二郎編『シリーズ20世紀中国史（1)』東京大学出版会2009年７月187-188頁。
（2）菊池秀明『中国の歴史10』講談社2005年９月131頁。
（3）実藤恵秀『中国人日本留学史』くろしお出版1970年10月512頁。
（4）実藤恵秀『中国人日本留学史』前掲513頁。
（5）菊池秀明『中国の歴史10』前掲135頁。
（6）実藤恵秀『中国人日本留学史』前掲514-516頁。
（7）菊池秀明『中国の歴史10』前掲135頁。
（8）中央大学人文科学研究所編『民国前期中国と東アジアの変動』中央大学出版部1999年３月232-236頁。
（9）飯島渉、久保亨、村田雄二郎編『シリーズ20世紀中国史(1)』前掲188-189頁。
(10) 中央大学人文科学研究所編『民国前期中国と東アジアの変動』前掲238頁。
(11) 中央大学人文科学研究所編『民国前期中国と東アジアの変動』前掲239頁。
(12) 中央大学人文科学研究所編『民国前期中国と東アジアの変動』前掲240-241頁。
(13) 飯島渉、久保亨、村田雄二郎編『シリーズ20世紀中国史(1)』前掲187-188頁。
(14) 源了円・厳昭湯編『日中文化交流史叢書（3)』大修館書店1995年10月503頁。
(15) 王暁秋『中日文化交流史話』日本エディタースクール出版部2000年４月415-416頁。
(16) 源了円・厳昭湯編『日中文化交流史叢書（3)』前掲502頁。
(17) 中央大学人文科学研究所編『民国前期中国と東アジアの変動』前掲188-189頁。
(18) 川島真『中国近現代史②』岩波新書1250、2010年12月82頁。
(19) 孫文研究会『辛亥革命の多元構造』孫中山紀念会研究叢書Ⅳ2003年12月321-

328頁。
(20) 黄孫「植物与人生之関係」『浙江潮』第９期、浙江同郷会雑誌部1903年11月31-32頁。
(21) 黄孫「植物与人生之関係」『浙江潮』前掲35-36頁。
(22) 黄孫「植物与人生之関係」『浙江潮』前掲32、33、34頁。
(23) 黄孫「植物与人生之関係」『浙江潮』前掲34-35頁。
(24) 黄孫「植物与人生之関係」『浙江潮』前掲36-37頁。
(25) 黄孫「植物与人生之関係」『浙江潮』前掲39頁。
(26) 壮夫「地人学」『浙江潮』第９期前掲1903年12月76頁。
(27) 壮夫「地人学」『浙江潮』前掲77-78頁。
(28) 江蘇師範生『江蘇師範講義・地理』江蘇寧属学務処　江蘇蘇属学務処1906年４月（序）。
(29) 江蘇師範生『江蘇師範講義・地理』前掲３頁。
(30) 江蘇師範生『江蘇師範講義・地理』前掲54頁。
(31) 江蘇師範生『江蘇師範講義・地理』前掲54-55頁。
(32) 江蘇師範生『江蘇師範講義・地理』前掲59頁。
(33) 江蘇師範生『江蘇師範講義・地理』前掲66頁。
(34) 江蘇師範生『江蘇師範講義・地理』前掲67頁。
(35) 江蘇師範生『江蘇師範講義・地理』前掲96頁。
(36) 江蘇師範生『江蘇師範講義・地理』前掲72-73頁。
(37) 江蘇師範生『江蘇師範講義・地理』前掲73頁。
(38) 江蘇師範生『江蘇師範講義・地理』前掲116頁。
(39) 世界語言文字研究会編集部『最新人生地理学』群益書局1907年７月（序）。
(40) 世界語言文字研究会編集部『最新人生地理学』前掲（凡例）。
(41) 凌廷輝編『人生地理学』新学会社1909年４月１－３頁。
(42) 凌廷輝編『人生地理学』前掲48頁。